



それだけのこと

Is that all there is?

人生は1箱のマッチに似ている。重大に扱うのはバカバカしい。さりどて軽々しく扱えば危険である(芥川龍之介)。賢明であるコツ、それは何を見過ごすかを知ることである(ウィリアム・ジェームス)。

今回の講座はペギー・リーの歌で始まる。“Is that all there is?” 「ただそれだけのこと？」というタイトルである。60年代後半に登場したトーキングブルース(語り歌)で、話者の女性は聴き手である私たちに直接語りかける。自分の過去に絶えず付きまどってきたある奇妙な感覚について語る。その感覚とは“たったそれだけのこと?”

人生で自分に強烈な印象を与えたいいくつかの出来事を振り返る。幼少時代に遭った火事、12歳の時に見たサーカス、成長して経験した恋——それらは彼女に強い印象を与えはしたが、彼女は必ず最後に“たったこれだけのこと?”とつぶやく。彼女にとって人生は、常に漠然とした虚無感と共にあるのであった。

何もかもつまらないと言うなら、なぜさっさと死んでしまわないのか?——聴き手にそんな思惑を代弁しながら、この歌は最後にどんでん返しを迎える。失恋したとき、彼女は死のうと思ったが、結局死ななかった。

この世の全てに幻滅し、何もかもつまらないと感じる彼女が、それでも自殺しない理由が最後に語られる。彼女は知っているのである。自殺しても、きっと同じようにつまらないだろう、と。死んでみたってつまらない。だったら、“踊り続けましょうよ”と、締めくくる。

何ともブラックで皮肉な内容の歌だが、これは非常に肯定的な歌でもある。この世のすべては、“ただそれだけのこと”にすぎないという諦観。人は一体何のために生きているのだろうか、とか、一体なぜ生まれてきたのだろうか、などと考え、人生に何らかの意味や理由を見出そうとする私たち。



一方、人間はどういう訳かこの世に生を受け、何となく存在しているに過ぎない、と生の混沌に目をむける。それは全くの偶然であり、超ラッキーなことでもある。宝くじで1等当たるのと同じで、生きて在るということは、何も意味や理由がないからこそ真に祝福すべきことなのである、というのが、この歌のテーマである。

だからこそ人生を謳歌しよう。人生は理由のない祭りである。祭りの真っ只中にいて、“あれ、自分は一体なにをやってるのか?”などと考えることは、それこそ意味のないこと。祭りは夢中で楽しむべし。この歌「Is That All There Is?」は、祭りの最中、それでもうっかり祭りの意味を考えてしまった人間を、手招きして再びそっと踊りの輪の中へ連れ戻すような、そんな歌なのである。

<事例 DVD等>

ペギー・リー 歌・Is That All There Is?
 漫画家・西原理恵子/最後の講義/東京女子大にて
 片岡鶴太郎/孤独を愛する生き方/何を見過ごすかを知っている
 石井重行/なんだ、歩けねえだけじゃねえか!
 小谷真理(まこと)/幸せなホームレスの生き方
 加島祥造/「求めない」/TAOの知恵
 歌・ドリス・テイ/ケセラセラ whatever will be will be

円了のホームページ: www.enryo.jp

